

令和5年度 第1回 岐阜市総合教育会議 議事録

- 1 日 時 令和5年5月26日（金）13時30分～15時30分
 - 2 場 所 岐阜市庁舎 6階 6-1 大会議室
 - 3 出席者 柴橋市長、水川教育長、武藤委員、横山委員、伊藤委員、加藤委員、岡本委員
 - 4 招聘者 玉川大学 教授 田澤 里喜 氏
 - 5 傍聴者 一般4名、報道関係者0名
 - 6 次 第
 - 1 市長あいさつ
 - 2 協議
- 「遊びと学びをつなげる9年間を見据えた教育」

(13時30分開会)

1 市長あいさつ

2 協議

(1) 事務局説明

(資料2「本市における幼児教育のさらなる推進～遊びと学びをつなぐ～」)

(2) 招聘者講演(玉川大学 田澤教授)

(資料3「遊びと学びをつなげる9年間を見据えた教育」)

(3) 意見交換

○武藤委員

これまでの総合教育会議や教育委員会での議論を通して、遊びの中で学びに向かう力を養うことが重要だとの認識はあったが、今回、具体的な事例を幾つも見せていただき、大変示唆に富む内容であった。子どもたち自身がこうした遊びを通した学びの重要性を実感することが大事であるが、幼児期でそれを自覚することは難しく、幼稚園の教員や保育所・園の保育士が、子どもたちの何気ない気づきや学びをいかに拾い上げ、意識づけして伸ばすか、いわゆるコーチングできるかが大事になる。自ら学ぶ力は、何かをつくり出すことや、社会を形成していくことにつながるものである。幼児期にそうした教育がしっかりとなされていれば、年齢が上がるにつれてそれが徐々に自覚できるようになり、興味を持って自ら学んでいく力となっていくのだと思う。自発的に学ぶ力を身につけるために、幼稚園での学びを踏まえ、小中学校の9年間、あるいはその先も含めて、発達段階に応じた実践をしていくことが大事だと思う。昨今、小学校にも教科担任制が導入され始めているが、学級担任が全教科を教える形式では、教科横断的に学びをすすめることができる。認知能力だけでなく、非認知能力も併せて育ていけるとよいと思う。

○横山委員

様々な教育課題があるが、最近特に幼児期の教育の重要性というものを感じている。この時期に磨いた非認知能力が、これから生きていく上での基盤となるからである。私は、幼い頃、自然の中で遊びまわっており、自然を教材に様々なことを学ぶことができた。

幼小連携に関しては、さまざまな壁を感じている。1点目は、幼稚園における公

私の壁である。2点目は、幼保の壁である。そして3点目は、幼保と小の壁である。こうした壁をなくすためには、単なる一過性の交流に留まるのではなく、組織として取組を継続するための仕組みが必要である。幼保の所管部署を教育委員会に一本化すると、より実質的な取組ができるのではないかと思う。また、幼稚園と小学校の連携を進める上で、幼稚園教員の人事を学校教員の人事の中に組み込んで行うことは、効果があると思う。どちらの立場も経験することで、更に濃密な取組になると思う。

○伊藤委員

昨今、児童生徒だけではなく、幼児期の子どもたちの育ちの重要性について、識が広がってきていると感じる。岐阜市においても、新たに設置された幼児教育課や子ども未来部、保育所が主体となった、遊びを通して非認知能力を養う取組やセミナーが以前より多く見られるようになった。また、私立幼稚園においても、こうした方向性に沿った活動が見られるようになっており、大変うれしく思っている。現在、3人の子どもを育てているが、幼児期は、遊びを中心として、頭や心、体を目いっぱい動かすことがこの時期ならではの成長に直結していると感じる。しかし、今は多くの保護者が仕事に就いており、その中で日々の子育てをしなければならず、なかなか子どもとの時間が取れないという状況もある。家庭でいかにとことん遊び、学びにつなげていけるか、検討が必要ではないかと思う。

幼児期に必要な教育は、早期教育や小学校教育の前倒しではないことを承知の上で申し上げるが、文字や数等に関して、遊びの中で自ら興味を持ってもらいたいと思っている。私の娘は、私と交換日記がしたいから文字を覚えたいと言っていたし、息子2人は、それぞれウルトラマン、恐竜が好きで、平仮名より先に、自らカタカナを覚えていった。こうしたことが、小学校において、学ぶ楽しさを実感すること

につながるのではないかと思う。例えば、様々な本の読み聞かせや生き物の飼育等、子どもたちが興味を持つきっかけとなるものや興味を持ちやすいものを日常に配置し、自ら学びに向かうきっかけづくりをすることも必要ではないか。

○加藤委員

田澤先生が講演でおっしゃっていた、「日常が大事」という言葉に尽きると思っている。子どもに限らず大人もそうだが、常にゴールを決め、そのために日々を過ごすことが当たり前の世の中になってしまっており、それが閉塞感を感じさせる大きな要因になっていると思う。あるべき姿へ近づけるために子どもを育てるのではなく、その時々発達段階に合ったことをしていかないと、子どもを枠にはめてしまうことになる。

遊びから学ぶということの重要性は、以前から言われているとおりであるが、遊びに集中し、日々を満喫するためには、安全・安心感がなければならない。人間は、安全な環境をつくることができれば、前に進んでいく力が体の中から湧き起こるものである。まずは、大人がこうした環境をつくるのが最も大事だと思う。また、自分の心や自分の体の声が聞こえず、親の顔色や周りの大人の顔色を見ないと生きられない子どもが非常に多くなっていると感じる。自分の五感が今どのように働いているのか、自分が今どんな気持ちを味わっているのかを感じられる体験を多くさせることが必要であり、幼児期においては、こうした環境をつくるのが特に必要ではないかと思う。

幼小連携に関しては、世界が突然変わらないようにすることが大事だと思う。幼稚園から小学校への変化は大変大きなものである。変化に対する許容範囲が広い子は、小学校のやり方にも馴染めるのだが、そうでない子は、この段階で苦しみ始めてしまう。小学校では、学習指導要領に基づき、学ぶべき内容が定められているが、

例えば、平仮名や数は、好奇心から勝手に覚えてしまう。そう考えると、小学1年生で勉強しなければならないことは、実は意外と多くないと思っている。小学1年生では、学校という場所に慣れ、ここが安全・安心だと感じる事ができれば、それで十分だと思う。

○岡本委員

私が子どもの頃は、外で近所の友だちと夕方遅くまで遊び、その中でけんかをしたり、笑いあったりしたのだが、息子をみていると、人と何かをするのではなく、物を使って遊んでいることが多く、遊びそのものが大きく変わってしまっていると感じる。そう思うと、遊びを通して、好奇心だけでなく、周りの人との関わり方や集団で何かをするということも同時に学んでいたのだと思う。

社会や仕事において、明確な正解があることは少ないのだが、私の会社に入社してくる若い方を見ていると、正解を求めてしまうことが気になっている。昭和の時代に必要とされた人材像からすれば、こうした考え方で十分だったのだろうが、今は、他社と違うものをどのように生み出すかが求められている。幼児期には、みんな違ってみんないいとされていたものが、小中高大で画一的な教育が行われ、社会に出ると、再び他人と違うことを求められる状況となっている。好奇心をもってやってきたことよりも、やらなければならないことしか評価されなくなると、子どものモチベーションが下がってしまうことは想像に難くない。6年生の担任だった教員が翌年度1年生の担任になることも珍しくないが、どこまで1年生の目線に合わせられるのだろうか。人事異動や配置、仕組の整備等により、幼児期に大切にされている教育が、何らかの形で小学校以降も続いていくとよいと思う。

○水川教育長

私もかつて中学3年生の担任から小学3年生の担任になったことがあったが、1か月ほどで慣れるものである。田澤先生の資料のスライド18にあるように、小学校学習指導要領の総則には、「幼児期において自発的な活動としての遊びを通して育まれてきたことが、各教科等における学習に円滑に接続されるよう、生活科を中心に合科的・関連的な指導や弾力的な時間割の設定等、指導の工夫や指導計画の作成を行うこと。」とあるが、私は、幼児期の遊びを通した学びは、小学校の教育活動全てに生きると考えている。本市の公立幼稚園2園の実践は、探究の種をまくことと、探究の芽生えが見事に子どもの中でストーリー化されており、全国に誇れるものである。こうした遊びの質の高さは、次の3点に由来していると思う。1点目は、目の前にあるリアルを、五感を通して感じていることである。2点目は、小学校のような時間の制限がないことである。そして3点目は、探究のエネルギーである知的好奇心を持たせていることである。この3点は、幼保小接続を考える上でのキーになると思う。幼稚園で展開されている遊びは、自分で決めてやってみるという選択と行動の繰り返しであり、これが子どもたちに無制限の夢中を生み出しているのである。そのエッセンスを小学校教育に取り入れていくことが必要である。課題は、幼稚園の公私の違い、幼保の違い、幼保と小の違いを具体的にどう埋めるかである。幼児教育側が歩み寄るべきか、小学校教育側が歩み寄るべきか、具体的な手法も含め、後ほど、委員の皆さんからご意見を伺いたい。

○柴橋市長

新型コロナウイルスの感染拡大による学校の臨時休業中のことだが、先生方は何とか子どもたちの学びを止めるまいとプリントを配る等工夫をされていたかと思う。そうした中で、自ら自覚し、学ぶことができた子たちと、何をしてよいかかわらず、動画視聴やゲームに没頭してしまった子たちに二極化してしまった教訓があ

る。探究的に自ら考えて行動できる子どもたちを育むことがどれだけ大事か痛感した。幼児期の子どもたちは、何の指示もなく自ら遊びに没頭する。本来、子どもたちはそうした力を持っているのだが、義務教育の段階でそれが失われていくのは非常にもったいない。こうした本来持っている力をどれだけ伸ばせるかが小学校以降の課題であると思う。

先日、県立岐阜高等学校創立150周年を記念した野球の試合を観戦したが、隣に座られた大先輩が、「最近、ツーアウトランナーなしにもかかわらず、バッターが1球ごとに監督の方を見ている、これは指示待ちであり、最近の子どもの様子を表している」とおっしゃっていた。次は何をすればいいのか、何が正解なのか、そのとおりにやるのがよいといったようになってしまっているのだが、幼児期は決してそうではない。こうした変化は、子どもが育つプロセスのどこかにある分岐点で起きているはずだ。例えば、田澤先生の資料のスライド7にある「手はお膝」や「お口チャック」は、私も言われた記憶があるが、周りと同じ行動をしなければならないというところからきているのではないかと思う。型どおりのこのような学び方をしなければならないというところから、この子は何をしたいのか、どういった学び方が合っているのかを、一人ひとり見つけていくといった方向へシフトしていくことが非常に重要だと思う。

○横山委員

水川教育長、柴橋市長の話をも併せて考えると、今盛んに言われている、個別最適な学びというものに行きつくのだと思う。

水川教育長から、変わるべきは幼児教育か小学校教育かという投げかけがあったが、私は、小学校入学当初のスムーズな導入・移行さえ意識すれば、それほど大きく変える必要はないと思っている。

○水川教育長

文部科学省が策定した、「幼保小の架け橋プログラム」の対象は、5歳児から小学校1年生の丸2年間となっており、これまでの3月、4月を中心とした取組から方向性が変わってきている。幼稚園等では、5歳児の段階で、小学校の一日留学を行って接続を図っているが、こうした体験的な接続ではなく、教育課程そのものの接続方法を検討しなければならないと思う。

また、幼保小の接続を考えたときに、本市の公立幼稚園2園の実践を、全ての私立幼稚園、保育所・保育園へ伝えていきたいと思っている。

○岡本委員

経営者の視点から見ると、私立の幼稚園、保育園では、子どもを集めるためのセールスポイントがどうしても必要になると思う。そう考えると、今岐阜市が考えている、遊びの中の学びを他の幼児教育施設にも広げていくという方向性と必ずしもリンクしない場合があるのではないかと。「遊びの中の学びを通して、具体的には、このようなことができる子」を育てていきたいというメッセージを強く打ち出していくことで、私立にも取り入れていただきやすくなるのではないかと。

○加藤委員

私自身、早期教育賛成派ではないが、人それぞれに向き不向きはあるのだから、多様な選択肢があることはとても大事だと思う。虫に興味のない子や、発達障がいの子の中には虫が嫌いな子もいる。また、自由度が高いことにしんどさを感じる子もいる。こうしたことを、大人がもっと理解すべきである。

また、大人が、子どもとはこういうものだとか決めつけ、子どもが後からそれにつ

いてきているようなパターンも多い。同じ年齢の子でも発達状況は様々であり、個々をしっかりと見ていく必要がある。

子どもの数が減っており、一人ひとりに目を向けやすくなっている。教員が、コーチのように、一人ひとりの強みや弱みをしっかりと把握し、それぞれに合った学習を提案できるように、学校は変わっていかなければならないと思う。

○横山委員

今回のテーマで重要なのは、ギャップをどう埋めるのか、連続性をどう担保するのかということである。幼保小の架け橋プログラムを実現するのはかなり大変だと思う。公私、幼保の各施設が、どのような方針の下で、どのような教育を行っているのかをしっかりと把握した上で、それをどのようにつなげていくと連続性が生まれるのか、地域ごとに、具体的に考えていく必要があると思う。

○武藤委員

岐阜市の子どもたちは、市立の小学校に入学する子がほとんどだと思う。私立幼稚園は、卒園した子が、小学校入学以降どのような子に育ってほしいと考えているのか、皆さんの話を聞いていて気になった。我々がこうして議論している内容をどこまで念頭に置いているのか、あるいは置いていないのか。取りあえず卒園するまでの間だけを見ているのか、あるいは我々とは違った理想像を掲げ、小学校以降も見据えた教育をされているのか。こうしたイメージの摺り合わせも、ギャップ解消や連携促進のためには必要だと思う。

○伊藤委員

幼稚園や保育園は、様々な選択肢の中から選ぶことができる一方で、小学校は、

多くの子が地域の小学校に行かなければならない。それぞれの学校によって、子どもの数や雰囲気、方針等様々なのだから、校区外の学校へ通うことが選択できるよ
うにする等、もう少し融通が利くとよいのではないかと思う。

○田澤教授

水川教育長がおっしゃったとおり、幼児期の育ちは、小学校の生活科だけではなく、小学校全体につながっていくものだと思っている。以前、岐阜市立加納幼稚園の実践を拝見させていただいたが、子どもが自ら動いており、それが成長につながっているようで、本当に素晴らしい園だと感じた。伊藤委員がおっしゃった、お母さんに手紙を書きたいから文字を覚えたというエピソードは、とても素晴らしいことだと思った。遊びを通した学びとは、まさにこのことである。

公私の壁、幼保の壁、幼保と小の壁、それから、多様な選択肢が必要であるという話があったが、私立幼稚園の立場からあえて申し上げますと、全国的に取組が画一的になりつつあるのではないかと思っている。また、今の保護者は、自分の子ども以外の子どもと関わる機会がほとんどないまま幼児教育施設を選んでいる状況であり、自分の子どもに合った施設をしっかりと選択することが難しくなっていると思う。

○柴橋市長

子どもたちが遊びから得られるものは非常に大きい。私も、幼少期の頃は、よく野山を駆け回って遊んだものだが、今の子どもたちは、そうした機会が減ってきているかもしれない。幼児教育の中でそうした機会を多く設け、子どもたちが学んでいることは、とても良いことである。

先日、柳ヶ瀬グラスル35内に、「あそび場はまなび場」というコンセプトの

下、子育て支援施設「ツナグテ」をオープンした。体を動かして遊ぶだけでなく、何かを作ったり、描いたり、貼ったりといった様々な遊びができる。見学した際は、親子がわいわいと遊んでおり、子どもたちは幸せそうな様子であった。家庭と幼稚園以外の第3の居場所として、こうした遊びこめる場があることは、非常に有効だと改めて感じている。遊びの中の学びについて、幼稚園では引き続き取組を続けていって頂くとともに、こうした施設からも各家庭に考え方が浸透していき、それぞれの家庭の子育てに生かして頂けるとよいと思う。

本日の議論を踏まえ、引き続き教育委員会で議論して頂くとともに、市長部局でも様々な議論をしていきたいと思っている。

(15時30分閉会)